

2024年度 第37回ミュージック・ペンクラブ音楽賞決定！！

《 クラシック 》

1. ソロ・アーティスト部門 庄司紗矢香(ヴァイオリン)
2. 室内楽・合唱部門 サントリーホール チェンバーミュージックガーデン
3. オペラ・オーケストラ部門 東京・春・音楽祭
4. 現代音楽部門 東京都交響楽団 ジョン・アダムズ自作自演(第992・993回定期演奏会)
5. 研究評論・出版部門 白石美雪著『音楽評論の一五〇年 福地桜痴から吉田秀和まで』
(音楽之友社)
6. 功労賞 小澤征爾(指揮)
7. 特別賞 井上道義(指揮)

《 ポピュラー 》

1. 最優秀作品賞 渡辺貞夫『ピース』(ビクターエンタテインメント)
2. イベント企画賞 第11回「3.11 東日本大震災復興コンサート」
3. 新人賞 中村滉己(津軽三味線奏者、民謡歌手)
4. 著作出版物賞 永井良和著「ジャズとダンスのニッポン」(関西大学出版部)
5. 功労賞 谷川俊太郎
6. インターナショナル部門 ビヨンセ『カウボーイ・カーター』(ソニーミュージック)
クインシー・ジョーンズ

《 オーディオ 》

1. 技術開発部門 マランツ MODEL10(プリメインアンプ)
2. 録音作品部門 坂本龍一／Opus(Blu-ray)
3. 功労賞 サエクコマース株式会社創立50年

授賞式

2025年4月22日(火) 受付13:30～ 授賞式14:00～

授賞式会場:北とびあ カナリアホール

〒114-8503 東京都北区王子1-11-1 電話:03-5390-1100(代表)

一般社団法人ミュージック・ペンクラブ・ジャパン <http://www.musicpenclub.com>

MPCJ 事務局 080-8051-6652 / mail@musicpenclub.com

You Tube「MPCJ チャンネル」開設中！ X も是非！アカウント:@MUSICPENCLUB



MUSIC PEN CLUB, JAPAN

2024年度 第37回ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞者一覧

Comments & Profile

ミュージック・ペンクラブ音楽賞とは、少数の選考委員が選ぶ従来型の賞とは異なり、ミュージック・ペンクラブ・ジャパン約 130 名の全会員による自主投票によって選定されます。授賞対象は、基本的に、日本でその年に公開または発表された音楽界の全プロダクトやイベントです。それは録音録画の形で発売されたものの他、公演、著作、技術開発を含みます。選考基準は、当会の「クラシック」「ポピュラー」「オーディオ」の分野ごとに設けられ、各分野で授賞対象者・団体をノミネートし、最終的に全会員の分野を超えた投票によって決定されます。

ミュージック・ペンクラブ・ジャパン MUSIC PEN CLUB, JAPAN

会長：潮晴男（オーディオ）、副会長：石田一志（クラシック）・北澤孝（ポピュラー）

音楽賞実行委員長：三塚博

2024年度音楽賞選考委員および担当理事

クラシック 選考委員：江藤光紀、萩谷由喜子、長谷川京介、宮下博、山崎浩太郎

担当理事：池田卓夫、那須田務

ポピュラー 選考委員：朝妻一郎、北中正和、立川直樹、早田和音、三塚博

担当理事：中川ヨウ、原田和典

オーディオ 選考委員・担当理事：潮晴男、大橋伸太郎、小原由夫

《クラシック》

ソロ・アーティスト部門 庄司紗矢香（ヴァイオリン） Sayaka Shoji



2024年10月21日アルティノグル指揮フランクフルト
放送交響楽団日本公演、サントリーホール

© Junichiro Matsuo

写真提供＝ジャパン・アーツ

昨年10月、庄司紗矢香はアルティノグル指揮フランクフルト放送響とのブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》で純度の高い美音と力強いフレーズを駆使し、圧倒的な名演を成し遂げた。12月、庄司の呼びかけで世界中から名手が集まる「新ダヴィッド同盟」の室内楽では、庄司の総合的な音楽性の大きさと深さが演奏をけん引した。常に作品の奥深く分け入り、全ての音に魂を吹き込み、仰ぎ見るほど高い次元に到達する芸術性に心からの敬意を表したい。

（長谷川京介）

プロフィール 庄司紗矢香

東京生まれ、3歳でイタリアのシエナに移住。キジアーナ音楽院とケルン音楽大学で学び、14歳でルツェルン音楽祭にて、バウムガルトナー指揮ルツェルン祝祭管弦楽団との共演でヨーロッパ・デビュー、及びウィーン楽友協会に出演した。1999年、パガニーニ国際コンクールにて史上最年少で優勝。以来メータ、マゼール、ビシュコフ、ヤンソンス、テミルカーノフ等多数の一流指揮者と共演を重ねた。これまでに共演したオーケストラはイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団、クリーヴランド管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロサンゼルス・フィルハーモニック、ニューヨーク・フィルハーモニック、聖チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、マリインスキー歌劇場管弦楽団など多数。

室内楽・合唱部門

サントリーホール チェンバーミュージックガーデン

SUNTORY HALL

Chamber Music Garden



小菅優プロデュース「月に憑かれたピエロ」
2024年6月5日サントリーホール、ブルーローズ
撮影=池上直哉、写真提供=サントリーホール

内外の一流の団体によるベートーヴェンの弦楽四重奏曲の全曲演奏チクルスを柱に、さまざまな編成の室内楽を紹介するスタイルを定着させた。堤剛を中心に優れたアーティストが常連となり、人脈を広げていることも頼もしい。昨年の小菅優プロデュースの《月に憑かれたピエロ》は、その代表例となる素晴らしい企画だった。室内楽アカデミーで学んだ葵トリオやクアルテット・インテグラなどに、早くから実演の機会を与えた功績も大きい。(山崎浩太郎)

プロフィール サントリーホール チェンバーミュージックガーデン

2011年、サントリーホール館長のチェリスト堤剛の提唱により開幕。国内最大規模の初夏の室内楽フェスティバルで、クラシック音楽の原点である室内楽を、色とりどりの花が咲く庭のように気軽に楽しんでほしいとの願いを込め、「ガーデン」と名付けられた。総入場者数は8万名を超え、ブルーローズ（小ホール）の親密な空間で、演奏者の息遣いや表情を間近に体感できる。国境や世代を超えた奏者が集い、2010年開講の室内楽アカデミーの受講生と共に、室内楽の興隆に貢献している。

オペラ・オーケストラ部門

東京・春・音楽祭 Spring Festival in Tokyo

演奏会形式ではあるが、21世紀の東京のオペラ上演をリードしてきた。特に昨年は20周年を迎え、トップクラスの指揮者・歌唱陣を迎えて大作・名作を次々と上演。秋にはオペラ・アカデミーも開催した。こうした活動によって、ワーグナーやヴェルディなどの上演の知見が国内に蓄積された功績は計り知れない。室内楽でも企画性の高いラインナップを幅広く揃えている点、上野という土地の魅力を引き出している点も素晴らしい。(江藤光紀)



音楽祭 2024 《トリスタンとイゾルデ》 東京文化会館

©飯田耕治 写真提供=東京・春・音楽祭実行委員会

プロフィール 東京・春・音楽祭

東京・春・音楽祭(英: Spring Festival in Tokyo 略称: "東京春祭")は桜咲く春の上野を舞台に東京の春の訪れを音楽で祝う、日本最大級のクラシック音楽祭。株式会社インターネットイニシアティブ(IIJ)の鈴木幸一代表取締役会長が実行委員長を務める。毎年3月中旬から4月中旬、上野公園内の東京文化会館、東京藝術大学、各美術館・博物館を拠点に、国内外のアーティストによるオペラ、オーケストラ、室内楽などの演奏会を開催する。近年はリッカルド・ムーティが主宰するイタリア・オペラ・アカデミー、マレク・ヤノフスキがNHK交響楽団を指揮するワーグナー楽劇の演奏会形式上演などのシリーズが定番化している。2005年に開始した「東京のオペラの森」が前身で、2009年に「東京・春・音楽祭」と改称した。

現代音楽部門 東京都交響楽団 Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

ジョン・アダムズ自作自演(第992・993回定期演奏会)



現代アメリカを代表する作曲家、ジョン・アダムズが初めて日本のオーケストラを指揮する機会を実現した意義は大きい。高い技術と集中、パワーとスタミナを必要とする作品ばかり3曲が演奏された。自作自演という特別な機会でなければ、こんなきつい組み合わせはあり得ない。高水準を保ち続けた都響の技量と真摯な姿勢は称賛に値する。作曲者自身の指揮が生む響きのもつ説得力には、格別のものがあつた。(山崎浩太郎)

2024年1月19日、東京文化会館大ホール

撮影=堀田力丸、写真提供=東京都交響楽団

プロフィール 東京都交響楽団

東京オリンピックの記念文化事業として 1965 年に東京都が設立した。現在は大野和士が音楽監督を務めている。定期演奏会を中心に多彩な活動を展開し、「首都東京の音楽大使」として国際的な評価も得ている。

ジョン・アダムズ（作曲／指揮） アメリカ合衆国が生んだ現代最高の作曲家の一人であり、指揮者としても活躍する。《ハルモニーレーレ》（1985）など斬新で華麗な管弦楽曲やオペラは、著名指揮者や一流オーケストラがこぞって取り上げている。

研究評論・出版部門



白石美雪著 Miyuki Shiraishi

『音楽評論の一五〇年

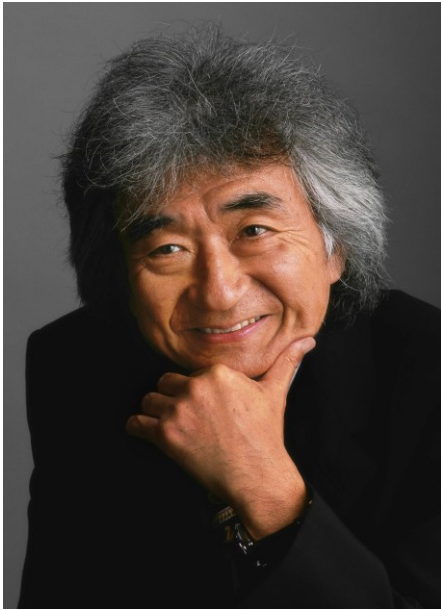
福地桜痴から吉田秀和まで』

（音楽之友社）

日本のクラシック音楽批評史を、明治維新から昭和 50 年代まで丹念に追いかけた労作。国内では音楽評論がいかに確立され、それがどう進化して現在の姿へ至ったのかを時系列で追い、綿密に検証した点で貴重な研究書となった。各時代の考証では、当時の新聞や記録など一次資料へ豊富に当たり、的確な分析を試みた姿勢が立派。現代に近い部分は吉田秀和と遠山一行の項で止まっている。続編やスピンオフ企画にも、期待ができそうだ。（宮下博）

プロフィール 白石美雪

東京生まれ。東京藝術大学卒、同大学院修士課程修了。20 世紀の前衛を中心に幅広く「現代音楽」を研究。朝日新聞でコンサート評、レコード芸術 ONLINE で新譜月評を担当。著作に『ジョン・ケージー混沌ではなくアナーキー』（武蔵野美術大学出版局、第 20 回吉田秀和賞受賞）、『すべての音に祝福を ジョン・ケージ 50 の言葉』（アルテス・パブリッシング）、『音楽評論の 150 年 福地桜痴から吉田秀和まで』（音楽之友社）など。武蔵野美術大学教授。



©Shintaro Shiratori

功労賞

小澤 征爾 (指揮) Seiji Ozawa

2024年2月6日に88歳で逝去した小澤征爾氏は音楽ファンならずとも誰もが知る存在だ。戦後の厳しい時代に父と兄がリヤカーで運んでくれたピアノを弾き、齋藤秀雄の早期音楽教育理念の結晶、桐朋学園一期生として指揮を学ぶ。ミュンシュ、カラヤン、バーンスタインという歴史的3巨匠に私淑して薫陶を受けた経歴は他に例がなく、ボストン交響楽団やウィーン国立歌劇場に輝かしい仕事を遺した。日本が世界に誇る大功労者といえよう。

(萩谷由喜子)

プロフィール 小澤征爾

1935年、中国のシャンヤン(旧奉天)生まれ。桐朋学園で齋藤秀雄に指揮を学ぶ。1959年ブザンソン指揮者コンクール第1位。ミュンシュの他、カラヤン、バーンスタインに師事。ニューヨーク・フィル副指揮者、シカゴ響ラヴィニア・フェスティバル音楽監督、トロント響音楽監督、サンフランシスコ響音楽監督等を経て1973年にボストン交響楽団第13代音楽監督に就任、2002年秋ウィーン国立歌劇場音楽監督に就任、2010年春まで務めた。日本においては、サイトウ・キネン・オーケストラを、恩師齋藤秀雄を偲んで1984年に組織。国際的音楽祭「サイトウ・キネン・フェスティバル松本(現セイジ・オザワ松本フェスティバル)」を創設し、発展させた。小澤国際室内楽アカデミー奥志賀、小澤征爾音楽塾、Seiji Ozawa International Academy Switzerland を設立するなど、その生涯を通じて若手演奏家の教育活動に尽力した。

特別賞

井上道義 (指揮) Michiyoshi Inoue



2024年12月30日

サントリー音楽賞受賞記念と

「引退」を兼ねた演奏会。

ショスタコーヴィチ《祝典序曲》

の最後に自身でシンバルを叩いた。

大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者だった時期（2014～17年）に大病を患い、奇跡の復帰を果たして以降はショスタコーヴィチとマーラーの交響曲に軸足を置き、師の齋藤秀雄やセルジュ・チェリビダッケの薫陶を受けたベートーヴェンから現代までの幅広い作品で入魂の演奏を繰り広げた。2024年末引退にかけての1年間、全国のオーケストラと続けた「最後の共演」は異例の高みに達し、音楽の背後にある人間性を慈しむかのような姿勢が多くの共感と呼んだ。（池田卓夫）

プロフィール 井上道義

1946年東京生まれ。1971年にミラノ・スカラ座主催のグイド・カンテッリ指揮者コンクールで優勝、1976年の日本フィル定期で日本に正式デビューした。以後、ニュージーランド国立響、新日本フィル、京都市響、大阪フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢などのシェフ・ポストを歴任する一方、1984年以降はオペラの指揮を積極化。シカゴ響、ミュンヘン・フィル、フランス国立管などへも客演した。2023年1月には自作のオペラ《降福からの道》を世界初演。

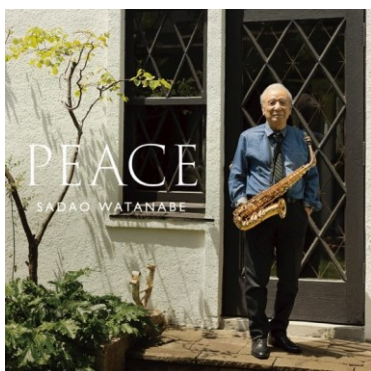
《ポピュラー》

最優秀作品賞 渡辺貞夫『ピース』 Sadao Watanabe

(ビクターエンタテインメント)



ひたすら美しい、渡辺貞夫カルテットのバラード・アルバム。タイトル曲<ピース>はコンサートで必ず演奏し続けている曲で、世界が混迷をきわめる今だからこそその平和への願いを希求する意志が、静謐なサックスの音色からにじみ出る。70年以上にもわたって一線でのプレイを続けてきた渡辺貞夫の演奏が、ポピュラーだけでなくクラシック音楽のライターから多くの票を得たというのも、ジャンルを超えてハートフルなスピリット、ピュアな音楽愛を強く感じさせるからなのだろう。艶やかなサックスの音色とともに、音楽の喜びにひたることのできる「ピース」は、まさに2024年度の最優秀部門作品にふさわしい。（岡崎正通）



プロフィール 渡辺貞夫

生涯にわたって日本のジャズを牽引してきたアルト・サクソフォーン奏者、渡辺貞夫が2024年も新作『PEACE』を発表した。御年91歳（当時）、約7年ぶりのスタジオ録音作である。バラード集と言ってもよく、ジャズ・スタンダード7曲にオリジナル曲4曲が収められ、温かい音色で聴く者の心を慰撫するアルバムに仕上がった。米よりラッセル・フェランテ (pf)、ベン・ウィリアムス (b) を招き、竹村一哲 (ds) を加えたクアartetで、平和への想い、想いの丈の深さを演奏に込めた名作だ。



2024年3月11日、第11回「3.11 全音楽界による音楽会 チャリティコンサート」がサントリーホールで開催された。チャリティオーケストラに、指揮は大友直人氏と渡辺俊幸氏のお2人。演歌界から五木ひろしさん、ジャズからはTOKUさん、クラシックからは仲道郁代さんに服部百音さんと、ジャンルの境界線を超えて一人一曲、志ある音楽家が集い、素晴らしい音楽会が展開された。しかも、観客ばかりか、出演者たちも寄付をしてこのコンサートに参加していた。

「音楽で人々の力になろう」という意志が、公演全体を貫いていた。東日本大震災当時、乳児だった方が、今年は中学生になるという。コンサートを軸に、震災で傷ついた人々を手助けしてきたこの活動／チャリティ コンサートに、今こそ大きな拍手を送りたい。(中川ヨウ)

プロフィール 第11回「3.11 東日本大震災復興コンサート」

2024年で11回目となったこのコンサートは、様々な音楽ジャンルを代表し、音楽に深く関わるメンバーが発起人となり、震災直後の2011年4月に開催したのが始まりです。コンサートで集まった寄付金は、「公益社団法人 3.11 震災孤児遺児文化・スポーツ支援機構 (3.11 塾)」を通じ、東日本大震災の孤児遺児の支援活動として活用しています。震災から13年が経とうとしている今、子供たちも成長し、多くの塾生たちが社会人として活躍しています。医療、音楽、スポーツなど、多種多様な分野における夢の実現に向けてがんばっています。このチャリティコンサートを通じて、継続的な支援とともに、震災のことを忘れないよう、しっかりと次世代に引き継いでいきたいと思えます。



新人賞

中村滉己 Koki Nakamura

(津軽三味線奏者、民謡歌手)



今回の新人賞選考も接戦だった。結果、卓越した実力はもちろん、邦楽では初の受賞に数えられること、大きな将来性を感じさせること、華があること、各世代や各ジャンルを結びつけることのできる可能性などを考慮のうえ、栄誉は中村滉己の頭上に輝いた。私は彼のライブに足を運んだことがあるが、老若男女のオーディエンスがみな、実にいい笑顔で音楽に聴き入っていた。ピースフルな表現者のゆくところにはさらなる栄光が広がっていくはずだ。(原田和典)

プロフィール 中村滉己

民謡一家に生まれ、幼い頃より民謡と三味線に親しみ、津軽三味線世界大会史上最年少優勝を成し遂げた若き名手。日本各地に伝わる民謡を、自身の感性で、今の時代にあわせアップデート&リメイクし、世界に発信する活動を展開。先代の巨匠達が紡いできた伝統を継承しつつ、様々な音楽分野との融合を通し、津軽三味線・民謡の可能性を追求している。

著作出版物賞

永井良和著 Yoshikazu Nagai 「ジャズとダンスのニッポン」(関西大学出版部)



著者の永井良和氏は社会学者であり関西大学教授。本書は大正から昭和戦前期のポピュラー音楽や大衆文化を詳細に語った大著だ。丹念な調査と精密な資料に基づいて当時の世相や風俗を著しながら、黎明期のダンスやその音楽を深く克明に描き出している。時代を彷彿させる貴重な図版の数々に親しみやすい文体。今年度の著作出版物部門(ポピュラー)は候補作が例年になく豊富だったが全会一致で本作品に決定した。(三塚 博)

プロフィール 永井良和

永井良和氏は都市社会学、大衆文化史を専門とする社会学者であり、風俗、音楽、スポーツなどを多岐に論じて、高い評価を得る。兵庫県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程学修退学。京都大学文学部助手、大阪教育大学助教授、関西大学社会学部助教授を経て教授。1993年橋本峰雄賞受賞。現代風俗研究会に属し、著書に『社交ダンスと日本人』(晶文社、1991)、『尾行者たちの街角』(世識書房、2000)、『風俗営業取締り』(講談社選書メチエ、2002)、『南沙織がいたころ』(朝日新書、2011)など多数。

功労賞

谷川俊太郎 Shuntaro Tanikawa

詩人として活動を開始した後、翻訳や絵本制作、文芸評論、脚本などさまざまな活動を展開してきたが、その中で大きく注目されるのが音楽面での活動だ。TV アニメ『鉄腕アトム』の主題曲をはじめ、小室等、武満徹、冨田勲、穂吉敏子、坂本龍一、信長貴富、谷川賢作、五輪真弓らさまざまなジャンルの音楽家と自由闊達なコラボレーションを展開。音楽の発展に大きく寄与した。今年度の投票では、ポピュラー音楽部門だけでなく、クラシック部門からも数多く得票。ポピュラー音楽全6部門中で最多得票数を記録した。(早田和音)

プロフィール 谷川俊太郎

詩人。1931年東京生まれ。1952年第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。1962年「月火水木金土日の歌」で第四回日本レコード大賞作詩賞、1975年『マザー・グースのうた』で日本翻訳文化賞、1982年『日々の地図』で第三十四回読売文学賞、1993年『世間知らず』で第一回萩原朔太郎賞など受賞・著書多数。詩作のほか、絵本、エッセイ、翻訳、脚本、作詞など幅広く作品を発表。2024年11月13日逝去。



撮影 深堀瑞穂



Photo by Blair Caldwell
for Parkwood Entertainment



インターナショナル部門

ビヨンセ 『カウボーイ・カーター』

BEYONCE 『COWBOY CARTER』 (ソニーミュージック)

このアルバムのキーワードのひとつ「カントリー」は白人の音楽と思われている。しかし主要楽器のバンジョーがアフリカ起源であることからわかるように、黒人の貢献も少なくない。ビヨンセは自分の過去を振り返りながら、カントリーの現在や未来の可能性に思いをはせる。ここにはカントリーだけでなく、バッファロー・スプリングフィールドやジョン・バティステも関与したサイケデリック・ロック、ビートルズの「ブラックバード」のカヴァー、フォーク、ヒップホップなど多彩な音楽の要素が含まれている。アメリカの音楽にとって歴史、地理、社会、人種、性が持つ意味とは何なのか。このアルバムはあらためてその常識を問い直す三部作の二作目だ。(北中正和)

プロフィール ビヨンセ

1997年にデスティニーズ・チャイルドとしてデビューし、グループとして(ベスト盤含む)、ソロ・アーティストとして全トータル・セールス 1 億枚以上を誇る史上最強のヒロイン。ソロとしてリリースしている全8作のアルバム全てにおいて初登場1位を記録、グラミー賞史上最多ノミネート数獲得アーティストのひとりでもある。

インターナショナル部門

クインシー・ジョーンズ

QUINCY JONES



Q：ソウル・ボサ・ノストラ/
クインシー・ジョーンズ

ジャズから始まりポップスに活動範囲を広げ、ロック、ラップ、ヒップ・ホップとその時代の新しい音楽の持つ可能性と素晴らしさを我々に、時にはアーティストとして、また時にはプロデューサーとして、そしてまたある時にはレコードレーベルの経営者や音楽業界のオピニオンリーダーとして、永年にわたって示し続けてくれた功績は、他の誰も追随を許さないものがある。

(朝妻一郎)

プロフィール クインシー・ジョーンズ

1933年イリノイ州シカゴ生まれ、2024年ロサンゼルスで死去。音楽プロデューサー、作曲家、編曲家として1950年代から第一線で活躍を続け、グラミー賞をはじめとする音楽賞を多数受賞している。マイケル・ジャクソンと共同プロデュースしたアルバム『スリラー』はギネスで「史上最も売れたアルバム」に認定された。

《オーディオ》

技術開発部門

マランツ MODEL10 (プリメインアンプ)

株式会社

ディーアンドエムホールディングス



アナログ/クラス D、デジタル入力の有無と、選択肢の豊富さで他を圧倒するマランツ・プリメインアンプ群の頂点に位置する製品。同時にハイファイ、AV プリの両方で取り組んできたクラス D デジタルの現時点での総決算といえる。デンマーク PURIFI 社と共同開発したデュアルモノ・シンメトリカル ClassD パワーアンプを搭載。高効率クラス D パワーアンプの採用で一筐体の中に HDAM+HDAM-SA3

電圧帰還型アンプ回路とフルバランス構成のセパレートアンプグレードのプリアンプを収容した。

本機の新機軸に、最大 4 台 (8 チャンネル) までボリュームを連動させる F.C.B.S.機能がある。複数の本機を連動させてバイアンプやマルチアンプ、サラウンドシステムを発展的に構築することができる。最も考えられる使用法に本機二台をリンクケーブルで同期させるバイアンプ駆動があるが、パワーアンプだけでなくプリアンプもデュアルモノ (L、R 独立) になり、その時のチャンネルセパレーションは圧倒的である。マランツの挑戦心と技術力が評価され、受賞にいたった。(大橋伸太郎)

録音作品部門

坂本龍一 / Opus (Blu-ray) Ryuichi Sakamoto



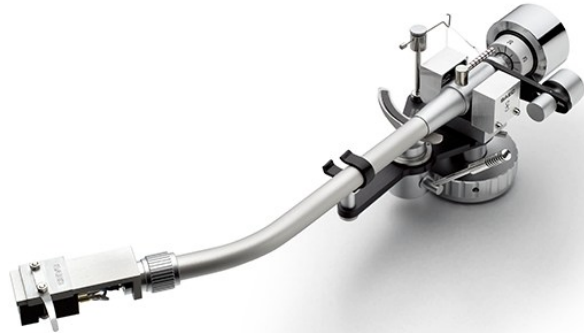
「教授」のニッネームで知られた、現代日本を代表する作曲家であり、ピアニストが鬼籍に入ってから、早くも 2 年が経過した。しかし、今以てその活動の残存は多大であり、坂本龍一にまつわる展示会やイベントは数知れず開催されている。

本作は、受賞作となったブルーレイの他に、CD や 3 枚組 LP でもリリースされている。劇場公開も実施された最後のソロコンサート、癌に蝕まれた体を奮い立たせて臨んだ渾身の最終公式録音なのである。坂本が気に入っていたという NHK の 509 スタジオにヤマハのコンサートグランドピアノを設置し、お馴染み“戦メリ”のテーマやピアノ・ソロ初演奏の「東風」など、自身選曲による 20 曲をプレイ。ドルビーアトモスによる豊かな音場感が余韻のアトモスフィアをリッチに響かせる。観る側にも相応の体力と緊張感を強いるのだが、観賞後の穏やかな心情は何故なのだろう。

(小原由夫)

功労賞

サエク コマース株式会社創立 50 年



サエク WE-4700

1974 年 12 月、サエクコマースは北澤貞夫によって東京の大森で誕生したオーディオ・メーカーである。設立と同時に前例を見ないダブルナイフエッジ型という精巧な懸架方式のトーンアーム、WE-308N を発売し話題を集める。1982 年に CD が登場してからもアクセサリやケーブル類の開発をおこない、オーディオ機器の下支えをおこなってきた。2005 年、先代社長の急逝を受け北澤慶太がその任に就く。2014 年、PC-TRIPLE-C の素材を用いたケーブルを、2017 年、この導体をさらに進化させた PC-TRIPLE-C/EX のケーブルを発売。2019 年、名機 WE-407 の次世代トーンアームとして WE-4700 を開発するなど今日に至るまで積極果敢な姿勢を見せている。(潮晴男)